

論文の内容の要旨

氏名：中田知宏

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：リヒャルト・ワーグナー 音響的創意にみるチューバの用法 —《指環》における物語る
チューバへの変遷—

リヒャルト・ワーグナーの舞台作品のなかで、改訂版を含めるとチューバは《さまよえるオランダ人》《タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦》《ローエングリン》《トリスタンとイゾルデ》《ニュルンベルクのマイスタージンガー》《ニーベルングの指環》《パルジファル》に用いられている。これらすべての作品の完成までには長い歳月がかけられており、この間にチューバをはじめとした各楽器の用法や管弦楽法、作曲技法など、ワーグナーの音楽語法に深化が認められる。これら舞台作品のなかで、《指環》は従来の番号オペラと呼ばれる形式から脱け出し、作品全体に一貫したドラマ性を持たせる楽劇と呼ばれる総合芸術へと発展している。楽劇では、従来の形式における各場面をつなぐものとしても音楽の重要性が増し、管弦楽の言語的能力向上が必要となっている。そのため、ワーグナーは管弦楽を史上初めて4管編成に拡大し、管弦楽が選択できる音色を増やし、表現能力を飛躍的に向上させ、音響的創意をワーグナー自身の世界観の理想的表出に一層近づけている。こうした管弦楽の表現能力の発展は、管弦楽を構成する楽器群の用法に発達をもたらしている。さらに、楽器群の表現能力向上は、楽器群の要素であるチューバの用法の深化につながっている。本論文では《さまよえるオランダ人》から《指環》におけるチューバの用法の変遷を明らかにするため、管弦楽編成の変遷と特徴、《指環》での金管楽器群の構造分析、楽器製造技術の革新と産業革命との関連を切り口とし、ワーグナーの音響的創意にみるチューバの用法の解明を行った。また、ワーグナーが影響を与えた作曲家への影響にも言及し、ワーグナーの音楽史における意義を明らかにした。

ワーグナーの音楽的側面はこれまで多くの議論的とされてきた。《指環》をはじめロマン的オペラ《さまよえるオランダ人》、《タンホイザー》、《ローエングリン》以降の舞台作品について、管弦楽法や作品の成立過程、作曲技法を主な対象として研究が行われている。他分野における論考の一例として、オペラの形式論や作品中に登場する概念、ワーグナーの精神論や政治的思想などを対象とした研究が展開されており、多くの議論が見られる。多分野でこれほど多くの研究がなされているにも拘らず、ワーグナーの独創的な音響的創意の構成要素であるひとつの楽器の用法の変遷に関する研究は行われてきていない。本論文では、ワーグナーにおけるチューバの用法の変遷に焦点をあてる。その成果は彼の金管楽器における用法の基礎研究と意味づけられる。また、これまで演奏者としての議論は音楽学のフィールドでは十分に語られてきていないため、本論は演奏者の立場からの考察も適宜取り入れ、ワーグナー作品のより忠実で発展的な演奏・再現への寄与を目指している。

本論文はワーグナーの音響的創意を軸に議論を展開する。音響的創意とは、ワーグナーの舞台作品を創る要素のなかで、ワーグナーが表現対象を音響によって聴き手に伝える試みや工夫である。本論では、作曲技法をはじめとした音楽語法なども音響的創意の一部として解釈する。本研究ではワーグナーの音響的創意と各構成要素の相関関係を検討しながら音響的創意の構成要素であるチューバの用法を明らかにした。第1章ではワーグナーの管弦楽に関する研究の現状について言及し、第2章では管弦楽編成の変遷と《指環》における金管楽器群の構造を明らかにした。第3章においてチューバの用法の変遷について論考し、第4章では金管楽器の発達と産業革命による楽器製造技術向上との関連について考察を行った。以上の論考によって次の結論が得られた。

ワーグナーの舞台作品において管弦楽編成は2管編成、3管編成、4管編成と段階を追って規模を拡大した。金管楽器の同一楽器同一音色による三和音の演奏が可能となった3管編成は、《タンホイザー》での実験的試みを経て《ローエングリン》にて確立されていた。その後、ワーグナーは4管編成拡大の前に、《トリスタンとイゾルデ》では「移行の技法」や「トリスタン和声」、《マイスタージンガー》においては旋律楽句を互いに連結させる複雑を極めた技法を用いて音楽語法を進化させた。それらによって管弦楽の言語的能力はより一層高められ、《指環》における管弦楽や各楽器による表現能力の飛躍的な向上が認められた。さらに、この4管編成における金管楽器群には特徴的な構造が見られた。大別すると次の三つが挙げられる。一つめは、基本的構造が3管編成と付加1管の組み合わせであり、付加1管の部分に加えられたバス・トランペットやコントラバス・トロンボーンによって各楽

器群の低音域が拡大されている。二つめは、新しい楽器によって金管楽器群のなかのグループが従来の3管編成までのホルン・グループ、トランペット・グループ、トロンボーン・グループから、コントラバス・チューバとワーグナー・チューバによるチューバ・グループが加わり4グループとなっている。三つめは、金管楽器群という音響創造単位における音色的融合である。付加1管に加えられたバス・トランペットやコントラバス・トロンボーンが音色的接着剤になり、トランペットからコントラバス・チューバまでの音域が隙間なく埋められていた。さらに、コントラバス・チューバやワーグナー・チューバの新しい音色・響きが管弦楽に用いられることによって、《指環》より前の金管楽器群にはなかった、まったく新しい管弦楽・金管楽器群の響きが生み出され、ワーグナー独自の金管楽器群の音響創造構造が創り上げられたのである。

この金管楽器群の一部であるチューバの用法は、ロマン的オペラのなかだけでも大きく発展している。ロマン的オペラ最初の作品である《さまよえるオランダ人》では、管弦楽化当初バス・チューバは用いられておらず、オフィクレイドが指定されていた。第1幕のアリアではチューバでは出すことの出来ないオフィクレイド独特の音色や響きが活かされ、また、序曲前半などに用いられる音型と、メンデルスゾーンの《真夏の夜の夢》に書かれているオフィクレイドパートの音型が似通っていた。これは、オフィクレイドの音色・響き、機能性を考慮して書かれていたためと考えられる。《ローエングリン》では3管編成の固定によって、金管楽器の同族楽器群というグループ形成を可能にしたことにより、モチーフと金管楽器の音色との関係が強固になっていた。さらに、《タンホイザー》までには見られない運動性の高い音型がバス・チューバにも任せられている。これに加え、《タンホイザー》における実験的試みが反映され、管弦楽の低音域拡充のための役割も増え、管弦楽法の発達に伴ってバス・チューバの用法にも深化が見られた。

《トリスタン》ではロマン的オペラでは見られないポリフォニックな旋律がバス・チューバに見られた。さらに、交響詩の形式が参考にされた《マイスタージンガー》では前奏曲が重要となる。バス・チューバはその前奏曲において、マイスタージンガーのモチーフを提示していることから、作品におけるバス・チューバの有意性が認められた。加えて、作品が持つ古典的要素によってファゴットとのアンサンブルも見られ、バス・チューバの汎用性の高さがあらわれている。《マイスタージンガー》では、バス・チューバの音色・響きがワーグナーの芸術・管弦楽に欠かせないものへと発展していると言える。

《指環》でのコントラバス・チューバやチューバ群の用法について、作曲技法との連関を中心として論考を行った。管弦楽の表現能力の飛躍的な発展に伴いチューバの用法にも深化が見られた。コントラバス・チューバの音色・響きは「音画技法」をはじめとする作曲技法との結びつきによって、巨人、大蛇、ドラゴンなど複数の意味を持っていた。重要な点として、《ラインの黄金》から《ジークフリート》において、コントラバス・チューバの音色・響きが巨人ファフナーと結びついていることも明らかとなった。これにより、コントラバス・チューバが「物語るチューバ」へと深化していることが示された。

これらワーグナーの音響的創意は、ブルックナー、マーラー、R. シュトラウス、ドビュッシー、ヴェルディ、シェーンベルクなどへの影響も見られた。さらに、ワーグナーの管弦楽の表現能力の向上と密接にかかわっているヴァルヴシステムの登場や産業革命による技術革新にも焦点をあて、金管楽器の発達と時代的背景とのつながりを示した。

全体の論考を通して、ワーグナー研究における新しい視点が明らかになったと考えられる。これまであまり目が向けられてこなかった金管楽器の個々の用法であるチューバの用法に焦点をあて、チューバのみでの用法と金管楽器群におけるチューバの位置づけやアンサンブルとしての用法を明らかにした。さらに、金管楽器の発達と社会情勢との関連性についての言及もひとつの成果である。本論文では、研究対象をチューバとして《さまよえるオランダ人》から《指環》までの用法の変遷を明らかにしているが、ワーグナーの管弦楽における金管楽器群の用法の研究をさらに充実させるためには、他金管楽器の用法の変遷も早急に解明が求められる。しかし、本論文がワーグナーの音響的創意、特に管弦楽におけるチューバの用法を明らかにしたことで、ワーグナーの金管楽器の用法における研究の足掛かりとなり、ワーグナー研究において一定の役割を果たしていると考えられる。